
Scientific Approaches to Language No.3 March 2004

はしがき

神田外語大学大学院言語科学研究センター（CLS）の2003年度における研究活動の成果の一端として紀要の第3号を刊行できましたことを幸いに存じます。

本号には、論文が10本収録されており、著者名のアルファベット順に並べられておりますが、理論言語学関連のいくつかの論文は、扱う現象や言語理論の観点から互いに関連しています。藤巻とInoueは共に難易文を扱っていますが、藤巻は「読みやすさ」といった「さ」接辞名詞化の観点から、Inoueは統語構造、特に範疇vPの役割に注目して考察しています。vPの機能と文構造については、Hasegawaが所有者上昇構文の分析を通して、外崎が複他動詞・他動詞の交替現象の観察から提案を行い、文の別の機能範疇であるTのEPP素性のあり方についてMiyagawa and Babyonyshevが「である」構文の分析から新しい考え方を提示しています。さらに、Tと関係しますが、主語が数量詞である時のスコープ現象を上田が、「の」「こと」補文の選択に関する一般化を鎌田が扱っています。山田の論文は「焼きたてのパン」といった「たて」接辞構文の分析で、藤巻の論文とともに統語と語形成に関わる研究です。また、斎藤は本紀要（SAL）第1号につづき言語表現に映し出される文化の問題を扱う理論としての「言語文化学」を取り上げています。言語教育関連では、小林が読解判定用の質問文とテキストの特性との関連を学生へのテスト結果を踏まえて討議し、言語教育と評価にかかわるモデル構築の可能性を追求しています。

CLSでは、下記の通常の研究活動に加え、日本学術振興会科学研究費の助成を受けているプロジェクトの活動を様々な観点から支援しています。2003年度には、研究プロジェクト『テキスト理解と学習ーテキストの言語の特徴が理解と記憶に与える効果についてー』（研究代表者：堀場 裕紀江；研究分担者：長谷川信子、井上和子、小林美代子）が2002年度に引き続いて行われ、加えて新たに、木川行央教授を研究代表者とする3年間のプロジェクト『静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』が発足しました。『テキスト理解と学習』プロジェクトの2003年度の成果の一部は『科学研究費2003年度報告書』として別にまとめられています。その報告書の目次は本号巻末に掲載されていますが、言語理論と学習理論を横断的に考察した理論と実証、応用研究の成果が報告されています。科学研究費関連の報告書はこの報告書だけでなく、本センター発足の母体となった平成8年度から12年度にわたる5年間のCOEプロジェクトの報告書も、部数の許す限り郵送料などの実費をご負担いただくこととなりますが、お分けいたしております。ご興味のある方はCLSへご連絡下さい。CLSについてだけでなくCOEプロジェクトの研究活動と成果についてもCLSのホームページでご覧いただくことができます。また、通常の活動としては、井上和子CLS顧問による定期研究会だけでなく、国内外からの研究者を招聘したコロキウムが数回開催されました（巻末のコロキウム・レクチャー報告参照）。また、マサチューセッツ工科大学の宮川繁教授が前期後半および夏期休暇にかけて3ヶ月ほどCLSを拠点に活動され、コロキウムだけでなくレクチャー形式の研究会で講演されました。

本号は、研究員の山田昌史さんの献身的かつ緻密な働きなしには、到底全てを期限内にとりまとめることはできませんでした。また、事務担当の椎名千香子さん、細井洋実さんには、CLSの研究活動全般に大いに尽力いただきました。心より感謝しております。

2004年3月

言語科学研究センター・センター長 長谷川 信子

藤巻 一真 日本語難易文の名詞化について

本稿では、「方」接辞と同様の特性を示す「さ」接辞による日本語の難易文の名詞化を取り上げ、その構造と意味役割（付与）に関する問題について議論する。特にHoshi 2002等で主張されている θ -理論を仮定し、主要部直接付加構造による分析を試み、藤巻2003に引き続き、その妥当性を検討する。同時に、主要部直接付加構造における主語の問題についても議論する。もしここでの分析が正しいとすれば、この θ -理論の説明できるデータの範囲が難易文の名詞化と、可能性としてはその元になる難易文自身にも拡張されることになり、その妥当性が一歩増すこととなる。

NOBUKO HASEGAWA(長谷川 信子)

The Possessor Raising Construction: Transitivity, Causative, and Experiencer

Dealing with non-agentive transitives, Hasegawa (2001, in press) proposes a system where the small *v* category is considered to have two independently specified features, [\pm Object Case] [\pm External Role]. This paper is a sequel to it and proposes an analysis of the possessor raising construction (PRC), where the subject is interpreted as a possessor of the object, syntactically deriving the particular reading, namely 'experiencer', on the human subject of PRC. It will be shown that PRC is observed not only in transitives but also in certain types of causatives, -(s)ase in Japanese and have and get in English and that Hasegawa's system accounts for both transitive PRCs and causative PRCs in a unified way. The paper explores differences and similarities between causatives, experiencer causatives, and experiencer passives in both Japanese and English.

KAZUKO INOUE(井上 和子)

Japanese 'tough' Sentences Revisited

On the basis of the review of Inoue (1978) and reorganization of its contents, this paper arrives at a new proposal for an analysis of the four types of 'tough' sentences previously proposed by the author. Some important works on both English and Japanese 'tough' sentences are referred to as important theoretical and empirical sources. This paper is based on the following basic assumptions of crucial syntactic mechanisms: (i) the choice of *nitotte* as a matrix adjunct, (ii) the choice of *vP*. The choice of both (i) and (ii) derives Type I. The choice of only (ii) leads to the sentences like the following: *Momenmono-wa kawak-asi-yasu-i* ("Cotton textiles are easy to dry"). Choosing neither (i) nor (ii) results in Type III. Type IV is derived without choosing (i), (ii), and Verb-raising. Type II is exceptional in choosing a matrix subject, which is coreferential with the complement subject.

It is further assumed that topic phrases (TopPs) and focus phrases (FPs) as well as grammatical subjects play the function of sentence building in Japanese. The particle *ga* marking a focus is treated as one of the delimiters. Both topics and foci, marked with *wa* and *ga* respectively, are raised to TopP and FP respectively. It is assumed that these phrases carry specific features attracted by the same features in TopP and FP.

鎌田 倫子

補文の主要部ノとコトの定性選択

補文の主要部ノとコトの選択に、補部の<特定性>と補文の主要部の<定性>が一致するように<定性選択>が関係していることを以下の順で論じる。1) 動詞文の補語となる名詞は主動詞の<叙実性>ばかりでなく<現実モダリティ>によって指示性の解釈を変える。2) 主動詞の<叙実性>と<現実モダリティ>により決まる<事実性>によって補文の主要部のノとコトの適格性が変わる。3) <事実性>と補部の名詞の<定性>により決まる<特定性>によって、補文の主要部ノとコトの適格性が変わる。4) 主動詞の種類や場面により、補部に定か不定の補文を必要とする場合、補部の<定性>により主要部が決定される。以上から、補文の主要部ノとコトは補部の<特定性>により以下の<定性選択>を受けると結論する。

<補文の主要部ノとコトの定性選択説> (略称<定性選択説>)

1) 統語機能として、ノは「定名詞節」、コトは「不定名詞節」を形成する。2) 補文の主要部は、補部の<特定性>によって選択され、<特定性>が高い場合にノを、低い場合にコトをとる。

MIYOKO KOBAYASHI(小林 美代子)

Reading Comprehension Assessment: From Text Perspectives

This paper investigates the nature of reading comprehension questions. Very few studies have so far examined comprehension questions in relation to text features. Kintsch and Yarbrough (1982) and Shohamy and Inbar (1991) are among the few studies, and their results suggest that there is an interaction between text features and the focus of questions. The present study builds on these findings and examines how Meyer's (1975, 1985) model of content structure analysis can help identify what exactly reading comprehension questions try to measure. The paper then proposes a framework for characterizing comprehension questions, and examines the

characteristics of 40 questions in terms of their interrelationship of item types and item statistics based on the test results of 227 Japanese university students. Finally, implications for assessment practice are discussed.

SHIGERU MIYAGAWA(宮川 繁) MARIA BABYONYSHEV
The EPP, Unaccusativity, and the Resultative Constructions in Japanese

In this work in progress we explore the possibility that the EPP, which has been claimed to be "strong" universally for T, may not need to emerge when the verb is unaccusative. We present a detailed analysis of the -te aru resultative constructions in Japanese. There are two -te aru constructions, "intransitivizing" and "non-intransitivizing." It is the "intransitivizing" construction which we claim lacks the EPP on T. The nominative object of this construction must move out of its VP/ vP, but it does not go all the way to the matrix Spec of TP. The matrix T apparently does not project a specifier, which is consistent with the idea that it does not have the EPP feature. The other resultative construction, "non-intransitivizing," is a subject-to-subject raising construction and the T does have the EPP. While we do not attempt in this paper to try to explain the root of this difference between the two resultative constructions, it is possible that the difference is pointing to some fundamental property of the EPP which has yet to be discovered.

斎藤 武生
言語文化研究の方法と課題 (2)

ここでいう「言語文化」とは言語表現の意である。このことを確認した上で、本稿では、言語表現に映し出される文化の問題に取り組んでいるNSM理論に注目した。この理論を取り上げることは、オーストラリアで活躍する言語学者Wierzbickaのほぼ30年の研究歴を追うことにもなるが、言語文化研究とのかかわりは近年特に強くなりつつあるように見える。もともと言語形式の意味論を主たる関心事とするNSM理論は、自然言語の意味を自然言語で語ろうとするときに陥りかねない循環論をいかにして避けるかに焦点を当て、生得的かつ普遍的な意味の基本要素の確定に長い時間をかけてきた。本稿では、そうした過程で派生的に生じたとされる近年のカルチュラル・スクリプト理論に特に注目した。それとはまた少し違った形で、言語の文化論がNSM理論の延長線上で展開されていることにも注目した。その例として、Travis(1998)の「思いやり」をキーワードとする日本文化論を取り上げたが、その研究は単なる「文化論」ではなく、むしろ経験科学としての「言語文化研究」の一つのあり方を示したものと評価を本稿では与えた。最後に、NSM意味論が抱えるいくつかの問題点を指摘した。

外崎 淑子
「複他動詞・他動詞」交替の統語構造と語形成

日本語の形態的に対応する「複他動詞・他動詞」交替には、「預ける・預かる」のように「<与え手>が<受け手>に<もの>をV」「<受け手>が<もの>をV」となるものがある。本稿ではこうした「複他動詞・他動詞」交替には、「預ける・預かる」タイプのように、両者が同じ事象で視点を変えただけのものと、「かぶせる・かぶる」タイプのように、両者の事象が独立したものの2種類があることを明らかにし、それらの統語構造を提案する。どちらのタイプも単独述語であっても複雑統語構造を持っているのだが、「預ける・預かる」タイプは、複他動詞構造と他動詞構造は平行的で、ただvの外項素性と、追加項を導入する主要部(Applicative head)の与格素性のみが異なる。一方、「かぶせる・かぶる」タイプは、√Pまでが共通構造であり、それ以上が異なる構造であることを示す。

YUKIKO UEDA(上田 由紀子)
FQ Subjects and Scope in Minimalist Syntax

Ueda (2000, 2002, 2003a, 2003b) propose a new scope calculation system named a phase-based approach. The new system treats scope calculation as a feature-matching operation in CHL. We call this matching operation Fquant-matching. On the basis of our new approach to scope calculation, this paper explores scope interpretation in sentences with floating quantifiers (henceforth FQs), focusing on the case in which FQs appear in the subject position. We call subjects of this type FQ subjects. We observe interesting scope phenomena concerning FQs, which are problematic data for previous analyses. It is demonstrated that the mysterious scope facts in FQ subject constructions with and without scrambling are reducible to our phase-based approach.

山田 昌史

Event構造におけるアスペクト転換：「たて」構文の分析

本論文は、「焼きたてのパン」のような動詞に接続し、修飾要素を形成する形態素「たて」について記述的一般化を試み、「たて」構文の生成メカニズムをPustejovsky (1991)の提案するevent構造の観点から理論的検証を行う。「たて」構文が可能な述語は、有界/非有界のどちらの解釈も可能なアスペクト特性が語彙的に未指定であるアスペクト中立述語であることを観察し、「たて」構文は、形態素「たて」の複合によって、もともと中立的であった述語から有界的な性質を取りたてて生じる構文であることを明らかにする。本論文では、event構造におけるsubeventの顕在化のメカニズムを提案し、アスペクト的に中立である述語は、の顕在化未指定の2つのsubeventを持つと仮定し、「たて」が、のsubeventを顕在化することで、「たて」構文が成立すると主張する。